忠と云誠ゑ類なき本多うの秀吉運強くべ軍ゑるんあゝ者を討
づべとて弓鉄砲を制せゝ斯て忠勝長久手ゑ馳付ゝ軍終
て敵味方とも見えべこゝ所ゑ味方打勝小畑ゑ入せたまうと聞
りみよんで追付奉て御馬の側ゑ乗寄云ひあゝも小牧ゑ捨させ
まひゝる軍ゑ合不申と申々べ聞召取あゝず汝が躬ハ我身あり
とぶりひて小牧まゝぐめ後ゑ危さとあゝてゝて軍ゑ勝ゝと仰あ
りゝ其後天正十八年秀吉北條を打亡ゝ六月廿六日野州宇津宮
て平八と呼まゝり忠勝ハ下総の廳南ゑありゝ急ぎ参る秀吉諸
大将並居ゝる中ゑ呼出ゝ熊野より佐藤四郎忠信が曽を得させる
者あり四郎が忠義後世まで語傳ふ四郎ゑ劣らぬ人ゑ著せんとゝりゑ
ゑ謂りあゝいもりゑ答ゑる人なゝ其時秀吉四郎ゑまゝゝる者ハ平
八なり手細ハあゝくありと長久手の軍物ゝり忠勝の有様審ゑ言
て則曽を忠勝ゑ賜りゝ忠勝面目身ゑあまる心地ゝて出らゝるゑ
其晩又忠勝を招き傍の人を遠ざけ自茶を與へゝふいゝゝも諸大将
並居ゝる中ゑて汝が武勇を褒挙ゝる秀吉が恩あゝべゝ主君の恩と
いづまぞゝ問ゝて首を低て物言も頻ゑとゝれゝべ忠勝兼り誠ゑ忝
ゝゝん申せども累世の主君ゝ恩とあゝべきゑ非ゝゝ申さゝゝゝそ
秀吉愈感ぜゝれゝり

一説ゑ忠信の曽を賜りゝも悦ぶ色あゝゝゝくべいやゝと忠
信武勇ゝ羨ゝゝもあゝ主君ど仰ぎゝ九郎判官も吾爵位も
同じ唯世々家ゑ傳へゝる鹿角の曽こそゝとゝれと言ゝゝゝそ後忠
信の曽ハ二男忠朝ゑ譲り鹿角の曽ハ嫡子忠政ゑ譲りゝゝゝ忠

朝もおりゝ所やあらん其曽て書ろも付ずして置けるぞ

小牧陣の時抽原康政秀吉に事を誹て札に書織田家に向ひて弓を引事不義悪逆の至りなりと書て所々に立らるを秀吉歯噛して康政が首をとらん者に十万石の地を與へんとぞ觸られる其後東照宮と和平して婚姻の約あるる始の使に康政を賜りぐ〜と秀吉申されて京に上りて〜秀吉對面し小牧にて札を立らるる時汝が悪き首を一目見んとものゝ思ひしに今斯和睦に及べば其志を悦び思ふ家り此事を直に言んが為に迎へ〜小平太と呼んばいぐ〜敬爵然ぐ〜として式部大輔とぞ此時より申る備響礼あつて厚く馳走あるるぞ

勝頼亡て後武田家の士多く東照宮に仕へ奉る前に領〜る禄知を書て奉る〜仰出されるるは初鹿傳右衛門に加藤駿河守が二男にて兄の源五郎に川中島にて討死〜る傳右衛門其禄を受継〜し故禄地を書て出〜るに駿河守が二百五十貫の地も合せて書記せて駿河守が嫡子丹波三男を弥平次と云兄弟共に傳右衛門に源五郎が禄をとらて申べ〜れ駿河守が禄を含る事のあるべきやと言事聞えて本領四百貫の〜下〜賜へぬ傳右衛門人に皆親兄弟の禄地を記〜出して其儘賜へるに吾ひとり不然として御朱印に墨を塗て諂りざる故に かゝる有様なりと言を岩間大蔵左衛門訴申て無礼なるて仰ありて禄を召放さる翌年長久手にて傳右衛門密に御旗下に来て真先に〜三宅弥次兵衛と争ひて首を取傳右衛門に内藤四郎左衛門が傍に参て申賜はんやと云と其間十間計して御覧ぜら

を傳右衛門連来まして御らんじけるが御前に跪くゆゑに汝が無礼なりけれ
ど軍の先がけしけるがゆるさるゝぞと御詞に傳右衛門涙を流しける時三宅先
に臣を一番高名と御詞をかけさせられしかど傳右衛門は猶すゝみて首をさ
げ候と申たれば三宅が實ある志を感じさせ玉ひたり

○東照宮の小牧の陣を秀吉二重湟の城の櫓に上て見やりて高山右近
大夫幸任を呼で小牧に書翰を送て一戦せんと思ふなり十三万の軍兵
陣を整へて押出し後に柵の木結て引退ざる手立せんはいかにと云まし
ゝが高山是は思召止らせられ候へ小牧より此返書必怒らせ給はんことを申
来るべしさらんには秀吉増田長盛に書翰を書せ長岡忠興に敵陣の木
戸ある道に立よとて下知せらるは高山色を變じ御ありしも行なるぞ制し
たる秀吉忠興は弓箭のりごしき所へは思ひもよらじ剛の者を使はせん
と言ましたが忠興高山を睨みてつと立て馬に乗竹に書翰を挟み乗
行て村ぞうなる松原の小塚の上に押立て帰るを見て秀吉悦びてあつ
て小牧の陳より月毛の馬に乗紅の母衣掛たる武者書翰を取て帰りぬ
しばしあつて金の枇杷つけの指物さし鹿毛なる馬に乗たる武者書翰を
竹にはさみ元の所に立てたりあれ取来れと言れしが忠興又馬に乗
馳行て取帰るを秀吉披て讀るゝに東照宮の返書にはあらで渡邉半藏
重綱水野太郎作正重が書簡にて其詞に後に柵結て一足も引かじ
と思ひ定めて軍あらん事兎も角もなさるべく候三河者下部に至るまで
一足も逃ると申事露計も不存候とぞ書たりける秀吉讀も終らず怒ら
れければ高山されば斯候はんとて申することよと居ながら高に成て申す秀
吉冷笑ひ馬牽出させひたと乗僅四五騎討て松原の小塚に上て瞥しつ

を打ちたる敵の大将是喰へと大音に呼はりを小牧より唐冠の曹に孔雀の尾に羽織着たる秀吉あるを見て鎌砲を打かける秀吉天下の大将軍に八矢の中にものゝ入と言てきづ〳〵と帰らるゝ

○

尾州蟹江に滝川一益中入をし告来る時祐筆尊通といふ者御出馬可被成者也と書名を東照宮此可の字を削き今日に於て一字も大切也大敵を前に置可出馬とかゝれたり出馬をすゝめ其時とめたる也と仰られゝ

○

東照宮長久手の軍に勝せたまひ勢州蟹江の城前田與十郎を御攻あんとて打向はせたまふ所に加勢多く馳入たるを御覧じて敵いかゞ城中へ入と仰られを酒井左衛門尉忠次兼て何とて押留賜はぬぞと中も東照宮いぶ思ふぞと御尋あり〳〵忠次城ハ堅固なり多勢なりあば軍に攻落すべきなり御心に候と申れを聞召大将謀と言やうやめよと仰られゝ其後援兵の兼来たる船を追拂ひ兵粮道を絶せたまへば粮忽乏しく成て城を渡し降参しゝ東照宮四十二歳の御時なりしや

○

蟹江にて井伊直政兵をもつて秀吉の舟手の大将九鬼大隅守嘉隆日本丸といふ大船に乗蟹江の湊に漕入て打上て堤を隔て戦ひ〳〵引退て船に乗ゝるに入江の湊に東照宮の兵船角新造といふを横様に乗て左右に乱株をうち真中に取囲んとせし直政追かゝる九鬼が者ども多く討を水主揖取驚騒ぎて船を出し得もかゝる處に九鬼が士村田七兵衛鉄砲に薬を込間宮造酒亮が軸先に下知しゝ大音上て静に相ふるまを両軍ともに静めて見物をする其中に九鬼が者

共ひさ〳〵舟に乗組さるへ村田が躰を捨て走りて為の謀ゆるあり
斬て村田おりに矢坪に中アて間宮倒れ〳〵九鬼が者共力を得鉄
砲を打ケ舟を乗浮て湊を出るなり

○秀吉小牧に陣を出る時紀州の根来雑賀の一揆を押へ〳〵中村
式部少輔一氏を岸和田の城に置き〳〵紀州の一揆秀吉大坂を打
立とて二万三千計二手に分て一手へ東の山際より堺に向し一手
へ岸和田に押寄るやり雄の若者共二騎三騎城を出て寄手に向ひ
ぶ士大将早川助右衛門川毛惣左衛門引帰さと使をやるを一氏きて
かゝる時進で行重アるる武者を引くるに敗北するのよいさ打出ん
して鍬蓋が峯と名付し曽の緒を城を乗出る先に進んぶる者ども
管笠の馬印をかゝり見てもるる殿こそ出るなく軍に勝ぶるよと言程

一万餘の紀州勢に面もかゝ切掛て打破て七筋に分て逃る
を追ふ一氏に三百計にて堂の池に所に扣て先陣の帰るを待慶に
堺海道に馬煙〳〵見ゆ是に堺に向ひる敵の返し来るる荒
手れ大軍にかけ合て戦ん事思ひもよらぬ疾城に楯籠らんと口々に
へば一氏いやく退あるべ味方氣挫て打負ん一寸も退く時に先陣
を捨殺し城にも攻落さるべ一揆に何百万ある先陣をぶに切崩
もあるべ二陣に忽敗北もぶ我に任せて敵の一同にかゝるさ
地の理を料アて堂の池と前に〳〵大敵を待るる一氏馬をぶ悉く城
へ返し候へ馬を引付置時に刃退るる心の起るぶとて将兵に勝ケ
旗本三百計の勢槍を膝の上に置て折敷る新藤勘左衛門強弓矢
継早の手利あるが散々に射る射るるして手負死人倒るる重アて

りし時一氏弓の者に羽壹を勘左衛門に渡せ下知せられ愈指詰引詰射る矢あさ矢たりし一氏麾を取りしを以て立上る黒田如水は大坂にあり岸和田に敵神寄せ聞子の長政十四歳にあり岸和田にはいざすらんと七百計にて敵の後にかけ来るを一氏見て愈さきんて切て懸り追立て八百餘の首を取り如水は長政いたわしく処に黄羅紗の羽織着て鹿毛なる馬に乗今朝討取し首を鞍の四方手に付て馳廻るを見て悦る事大方なり

○

扨秀吉一氏に感状賜ひて又一氏は豊臣家諸将の中にも勝れ勇将なり加藤嘉明も羨慕ひて吾子の明成を式部少輔になしぬ竹中半兵衛重治は美濃菩提の城主なり後に秀吉の軍奉行なり謀略ある人なりしも打見る處は婦人のごとく軍に臨む時も猛成なる事なり馬の鞍に包み甲を着木綿の羽織一の谷と名付る曽の緒を結ぶ静に返して居る重治向に度々士卒戰ひて既に勝を立てしば重治軍は國の大事なり何方に行と問厠に行と答に重治爰に溺さるるも軍物語の大事の席を立事やあらじと怒られし

○

稲葉治左衛門は美濃齋藤家の士戰場にて必真先に独進出芒の如くなる所に居る故世の人是を芒の治左衛門と言ひし澤喜藏は美濃飛彈に隠れなき比類なき切名あり芋ゝ畠の槍澤一番なりと言吾に劣れり稲葉なりしに互に譲て決せず澤は吾早く進み稲葉なりしも手を出し隙に先に乗込ぶ實は一番稲葉なりと人皆是を賞し有吉武藏は足輕鉄砲に槍を持添て鉄砲を

うち其上ゝ一番槍を合せられぶ吾一番ゝ行ぶ園部儀太夫ゝゝの手を忘れ
ゝゝて駈出ぬ園部が一番ゝゝ譲りゝゝ同事ゝゝ戦國ゝゝゝ士
ゝゝゝゝゝ事ゝゝて

羽柴下総守勝雅の許ゝ二藏三藏ゝて物しゝゝゝゝゝ城ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ下総守城ゝり出て働き引取ゝゝを敵付来る二藏三藏門
を固ゝて楊簀戸を下して敵をたゝゝゝゝ勝雅下知して門を明て
敵二人ゝと出して討取ぶ近藤石見守加勢ゝゝゝゝが其子細を問ゝゝ
ゝゝゝゝゝ死地ゝ入ゝゝ敵ゝり是を討ぶ城兵除多死傷ゝゝゝ打ゝゝ
ゝゝゝて軍の勝敗ゝあゝゝゝゝゝ答ふ石見守武功の人なゝゝゝ故大
ゝ感ぜゝ

常山紀談巻之六　終

常山紀談

1051
8
116